

脈々と受け継がれる匠の技

伊達政宗に愛され、奥州の地で復興を遂げた大和伝の刀。
その質実剛健な技を、今も頑なに守り続けている刀匠・法華三郎信房。
鉄と炎の世界に身を置いた生き様の一部を拝見させて頂いた。

匠の技が結集した日本刀 1000年先まで残る業物

古くから日本刀は、単に斬るための道具としてではなく、日本人の精神を形作るひとつの象徴のような存在として扱われてきた。だからこそ戦国武将や江戸時代の武士たちは、それを「魂」と呼んで、大切に扱ってきた。そしてもうひとつ。日本刀には、人を魅了して止まない美しさが秘められている事も、忘れてはならない。

そんな日本刀を作るのには、幾人もの職人たちが匠の技を駆使しなければならぬ。その中で鋼を鍛え、日本刀の核と言える刀身を作るのが「刀匠」である。今も日本各地に刀匠と呼ばれる刀鍛冶は存在する。江戸時代には伊達家のお膝元であった宮城県にも、大和伝保昌派の製

法を継承する刀匠がいる。9代目法華三郎信房がその人だ。

大和伝というのは日本刀の分類のひとつで、もともとは大和国高市郡（現在の奈良県）が発祥の地と言われ、鎌倉末期に完成した刀の製法である。刀剣の歴史はこの大和伝から始まったとされている。それはシンプルで質実剛健な作風が多く、戦国の気風を纏い続けた伊達政宗がいかにも好む刀であった。

そんな大和伝の中でも保昌派の作風は地味で渋く、あまり一般受けしなかった。法華家では江戸中期の初代から4代目までは大和伝を作っていたが、5代目以降は華やかな刀文を持ち、一般大衆にも受けがよい備前伝を作っていたという。その後、約100年という長い間、大和伝は作られなかった。それを復活させたのは8代目法華三郎信

神の思し召しを受けらる匠・ 法華三郎信房

刀匠を訪ねて

横座の刀匠が火床で沸かされた玉鋼（たまはがね）をテコ棒で挟んで金床の上に載せると、間髪入れずに先手が大鎚をふるい叩く。瞬間、四方に湯玉が飛ぶ。



作業場の壁には火の神様である
竈神(かがみ)が飾られている。
刀を造り出すのは、
神との共同作業のようなものだと言う。



(写真・上) 鑄などの形状を打ち出す小鋸。かなりの重量がある。
(写真・中) 沸かした玉鋼を載せる金床。
(写真・下) 着火させるときに使う鉄の棒。



房である。そして大変な苦勞を重ねた末、大和伝の復元に成功した。自らも手伝い、その技を継承したのが、9代目信房を継いだ高橋大喜さんなのだ。

「刀ほど来歴がはつきりとしていないものは、他にはないでしょう。伝聖徳太子ゆかりの品」と言われている物も、調べて見ると全然違っていたりしますよね。しかし刀だけは織田信長が羽柴秀吉に与え、それが徳川家康の手に渡って、その後も脈々と受け継がれて今に至る。そんな来歴がはつきりしているのでは、日本刀は刀身を見るだけで「これは鎌倉時代の前期、何某がどここの国で打ったものだ」ということが、手に取るようにわかってしまうというのだ。だからこそ著名な人物の手を経て今に至る名刀は、来歴がはつきりしているのだ。裏を返せば自らが鍛

刀匠を訪ねて

神の思し召しを受ける刀匠・法華三郎信房

加減とするのだ。やがて作業場全体に、ゴウツツという風の音が響き渡る。火床の中では熱せられた鉄が燃え、表面が溶けて湯になる。湯からは火花が飛び散り、その熱さに我々素人は思わず顔を背けてしまう。「火の調節は毎日同じというわけにはいかない。風の加減や湿度によって違ってきます。だからその日に沸く(鋼を鍛錬するのに最適な温度まで上がったことを指す)場所は、経験を目一杯生かして探すのです」

こうして鉄を真っ赤に熱したら、横座と呼ばれるフイゴ前に座った刀匠が、金床の上に載せる。そして刀匠に向かい合っ



作刀に必要な技術と勘は一朝夕で身に付くものではない。

鍛錬のごく一部を実践その気迫に圧倒される

刀は炎によって鍛えられ、そして生み出される。その炎を作れることも単純ではない。鉄は周囲のものを吸収しやすい性質を持っているため、燃料に含まれる成分も吸収してしまう。だから火床で使う木炭は、松炭なのである。松炭の98%は炭素で、残りの2%が灰だ。これならば余分なものを取り込み、錆びやすい刀になることを防げる。

修行は松炭を仕事の内容に合わせて切ることから始まる。元の炭の形がどんなであっても、仕事の内容に合わせて目分量で割る。その地味な作業が一人前になるための第一歩で、「炭切り3年」と言われるほど。

こうして準備した炭へフイゴを使って風を送り、目当ての火



昔ながらの作業場。刀鍛冶の作業の中でも焼き入れをする際は鉄の色を見極めるため、月のない夜に行なわれる。

(写真・上) 松炭の火をおこしたら火床に移して温度を調整する。
(写真・中) 1200℃位まで熱せられた玉鋼。これを叩く。
(写真・下) フイゴで火の勢いを上げ、玉鋼を熱していく。

火の加減は、その日の天候などにより違ってくる。それを見極めるのも、経験がなければできない。





刀匠の仕事は火と鉄とに向かい合うものである。
加減は手で触って確認できないので、すべて目で覚える。

火造りと呼ばれる作業。小鋸を使って
鑄など、日本刀独自の形状を打ち出していく。
これを行なわないと、
刀の断面はフラットなままになってしまう。



親子とは言え妥協は許さず
鍛錬場の空気が張りつめる。



左が9代目法華三郎信房の高橋大喜さん。右はその息子の高橋栄喜さん。
現在、先手を務めているのは栄喜さんである。いずれ10代目信房を襲名するであろう。栄喜さんの息子が継ぐかどうかまでは未定という。

大崎市指定無形文化財、日本刀鍛錬技術保持者

法華三郎信房宅

〒987-1304 宮城県大崎市松山千石南亀田76

URL: <http://www.hokkesaburo.com/>



小鋸を使い刀身の形状を整える9代目の
法華三郎信房さん。79歳になっても要鑿(かくしゃく)としている。



火の加減を見る高橋栄喜さんは現在48歳。
この先、大和伝の技を継承していく人である。

刀匠を訪ねて

神の思し召しを受ける刀匠・ 法華三郎信房

立つ先手が、大鋸で打ち叩くのだ。その瞬間、真っ赤な湯玉が四方に飛び散る。
「すべての作業は材料と語り合いながら進めます。経験を積むことにより、素材が語りかけてくるのがわかるようになるのです。そして鉄の温度をみながら叩く。思ったより硬かったり軟らかかったりしたら、炎の温度を調節します。ほとんど直感で身体が動いてしましますよ」
ここで先手を務めているのは、10代目の息子の栄喜さんだ。先手は刀鍛冶の修行の中でも、最も難しいうえに大変な仕事だといくらくらい過酷。
「鉄は熱いうちに打て」と言う言葉の通り、1200度ぐらいに熱して叩く。鉄は温度が700度を下回ってしまうと、どうにもならなくなってしまう。この間、一瞬たりとも気を抜くことができない。
焼けた鉄を鋸で打って延ばし、

そして折り曲げる。熱いままの鉄に藁灰をかぶせ、その上から粘土水をかける。そしてまた火床に入れて熱く沸かす。何度も鉄を熱しては叩き、そして折って重ねてまた焼く。この折り返し鍛錬を繰り返すことで不純物が取り除かれ、炭素の量も均一になり、きれいな地鉄ができる。
「日本刀はこうして砂鉄と炭だけで作っているわけです。しかも折れず、曲がらず、よく斬れる刀を作るには皮鉄、心鉄、刃鉄という性質の異なる鉄を組み合わせなければならぬ。繰り返して鍛錬するのは、そのためでもあるわけです」
大和伝へのこだわりはそれが自らの技術だから
「日本刀を単なる武器として考えたならば、そこには刃文や肌などはいらぬわけです。焼きさえ入っていれば、斬れるわけ

ですから。そこに肌や刃文をつけるのは、日本人独特の感性だと思ふのです」と語ってくれた、栄喜さん。刀は最初、祭器や象徴として生まれた。やがて武士が台頭する平安時代の末期からは、武器としての使い道も多くなってきた。そうなるも、単なる武器としての位置づけはされなかった。むしろ鞘に収まっている状態でも、いい刀は相手を威圧することができる。すると刀を抜かずとも、勝つことができるのだ。刀鍛冶は、今

も昔もそれほどの一振りを目指している。
「刀は日本人の宗教といってもいいでしょう。武士たちは刀に恥じない生き方を体現していました。それは刀自体に魂が籠っていると感じていたからです」
そんな日本刀の中でも、大和伝は実用本位で素朴、作るのが難しいと言われている。それでも法華家が「大和伝にこだわるのは「自分の正統な技術だから」ということ。この技が受け継がれることを、切に願いたい。